

授業談話における笑いの検討 (2)

—2 学級の比較検討を通して—

市川洋子

(お茶の水女子大学院人間文化研究科)

【目的】

これまでユーモアによる笑いが授業の中で検討されてきた。コミュニケーション一般の研究ではユーモアといった面白さからの笑いだけでなくその様々な機能が指摘されているが、授業場面では十分にその検討はなされてきていない。またユーモアと学級雰囲気、ストレスとの関連についての研究では一貫した結果を得ていない。その理由としてユーモア感知の考慮不足が指摘されている。そこで本研究はユーモア感知の指標となる笑いを取り上げ、その関連を検討する。加えて笑っている生徒に対する教師の認知は検討されているが、学級内でみんなと一緒に笑わない子に対する研究はなく、またその生徒による授業認知やストレス認知は検討されてこなかった。

以上の問題意識から本研究では中学生 2 学級を対象に、同一教師による国語の授業観察と生徒への質問紙調査、教師への面接調査を通して①授業コミュニケーションにおける笑いの機能分類、その際の学級内で笑いが生じている範囲(個人・集団・クラス全体)の同定、②2 学級の比較検討による笑いと授業雰囲気、授業ストレスとの関連、③みんなと一緒に笑わない子の授業雰囲気・ストレス認知、その子に対する教師の認知の特徴、の 3 点を検討する。

【方法】

対象：公立中学校 1 年 2 クラス (1 組 33 名、2 組 34 名)。**授業**：教師経験 21 年の男性教師による国語(物語文)の一斉授業。**時期・観察時間**：1998 年 9 月下旬。1 単元分(各クラス 8 回×50 分)。**手続き**：①教壇の横に 2 台、後ろに 1 台の VTR を据え置きで撮影。記録 VTR を文字記録化し笑いが観察された状況からその機能を分類し、笑いの範囲も検討した。②生徒対象質問紙：伊藤・松井(1996)による項目から授業雰囲気を測定していると考えられた 27 項目。ストレスについては渡辺・塩谷・近藤(1993)のメンタルヘルスに関する質問項目から 3 項目。回答形式は 4 件法。③国語教師への面接調査：近藤ら(1984)によって開発された教師用 RCRT を用いて行なった。

【結果と考察】

以下では 3 つの目的にそって述べていく。

①面白さからの笑いだけでなく他者に対してある意図を持って発せられる笑いが観察された。具体的には 2 学級合わせて笑いが生じた場面 530 回 (1 授業平均 33 回) のうち、自分や他者の失敗を笑うことを通して受け入れる笑い(自己防衛的機能 18.49%、支援的機能 19.81%)や他者に対する連帯感から生じるような笑い(社交的機能 8.30%)、教師への応答や言いづらい事をスムーズに伝えるための笑い(会話進行調整機能 10.74%)が存在していた(表 1 参照)。

②観察された笑いの機能の割合には学級差がみられた。次に生徒対象の質問項目を因子分析して得た 4 因子(教師への信頼・生徒間の不和・授業困難・授業ストレス)の各因子別平均得点を学級別に調べた。2 学級の比較からユーモア感知の指標となる感情表出の笑いは両学級で多く観察され、その背後には「教師信頼」の高さと「授業困難」の低さがあり、非常に低い「授業ストレス」にもつながっていると推測された。また対他機能による笑いは学級差があり 1 組ではその笑いの範囲は広く 2 組では狭い傾向が見られた。つまり「生徒間の不和」は笑いの範囲を狭くすると推測された。

③質問紙調査から「みんなと一緒に笑わない子(1 組 2 人、2 組 3 人)」が他の生徒よりも「教師信頼」は低く「生徒間の不和」「授業ストレス」は高く認知していることが分かった。また教師からは「授業への参加が消極的」「他者への対応は不明確」と認知されていた。まとめると一緒に笑わない行為はその多くが教師や友人関係へのネガティブな認知やストレスを反映しており、教師にとっては授業不参加の指標として認知されている可能性が高いと推測される。

表 1 機能別笑いの回数とその範囲(2 学級合計)

笑いの機能	個人	集団	全体	合計	(%)
<対自機能>					
感情表出	63	96	62	221	(41.69)
緊張解放	0	0	5	5	(0.94)
<対他機能>					
社交的機能	8	36	0	44	(8.30)
自己防衛的機能	90	8	0	98	(18.49)
支援的機能	21	36	48	105	(19.81)
会話進行調整機能	32	21	4	57	(10.74)
合計	214	197	119	530	